柔道整復師の卒後教育　整形外科医の立場から

岡田 尚之[1)]，橋本 俊彦[1)]，南塚 直美[2)]，関口 勲[3)]，松本 揚[4)]

了徳寺大学・医学教育センター整形外科[1)]

両国みどりクリニック[2)]

上青木整形外科内科[3)]

了徳寺大学・整復医療･トレーナー学科[4)]

要旨

柔道整復師の教育に関しては，種々の方法・議論があると思われるが，今回卒後教育にあたる機会を経験した．

①当大学関連クリニックでは，若手柔道整復師による症例検討を中心とした勉強会をしているが，私も整形外科医の立場で参加している．皆で集まることで，熱い議論を展開し，さまざまな症例を見ることができる．経験の少ない若手にとっては有益であり，刺激になるという意見が多い．私も議論をする中で整形外科医として成長することができると考えている．

②大学勤務の柔道整復師とともに整形外科の学会に参加，発表する機会を得た．大学勤務前・後と某大学人体解剖学講座の実習室で解剖学的事項も検討し，日本膝・スポーツ・関節鏡学会にてポスター発表することができた．本人の情熱が十分にあり，時間をみつけて研究活動を行えば，柔道整復師以外の学会にも参加発表する門戸は開かれていると考えている．

今後も微力ながら協力・助言を行い，さらなる柔道整復師の地位・社会認識の向上に貢献したいと考えている．

キーワード　柔道整復師，整形外科，教育

Orthopedic education for Judo Therapists graduate from training schools

Naoyuki Okada[1)]　Toshihiko Hashimoto[1)]　Naomi Minamizuka[2)]　Isao Sekiguchi[3)]　You Matsumoto[4)]

Medical Education Center, Faulty of Health Sciences, Ryoutokuji University[1)]

Ryougoku Midori Clinic[2)]

Kamiaoki Seikeigekanaika[3)]

Department of Judotherapy and Sports Medicine, Faulty of Health Sciences, Ryoutokuji University[4)]

Abstract

We assessed opportunities for Judo Therapist training school graduates to continue orthopedic education. The first is the study meetings for the staff of various clinics associated with Ryotokuji University. We thought their discussion was a very important element in improving their abilities for diagnosis and therapy, especially for young therapists. Additionally, we think these meetings have nurtured our knowledge and treatment techniques. The second is the presentations they make at orthopedic conferences. During this evaluation period, an assistant of the university clinically and anatomically studied the patella, presenting his

findings at the poster session of the 3rd Annual Meeting of the Japanese Orthopedic Society of Knee, Arthroscopy and Sports Medicine. He was pleased by the chance to participate in the meeting and gained new ideas for future research. We consider this as contributing much to improving the status of Judo Therapist in society towards the future.

Key Words：Judo Therapist, Orthopedics, education

Ⅰ．はじめに

2009年より整形外科医として柔道整復師養成学校で整形外科教育を行っているが，教育には種々の方法があり議論されるべきであると考えている．また，臨床の現場にて整形外科医として柔道整復師と協力し何ができるかは，常に考えていることである．

前回の紀要において柔道整復師養成校での整形外科教育の工夫について述べた．今回は，整形外科医として柔道整復師の卒後教育にあたると思われる場に参加・協力することができたと考えているので紹介提示，考察する．

Ⅱ．方法と結果

卒後教育１：勉強会

了徳寺学園・大学関連クリニックの若手柔道整復師を中心に症例検討を目的とした勉強会を行っている．私もその場に整形外科医として参加している．

上青木整形外科内科の関口柔道整復師の提案により，月に1度，クリニック勤務終了後の21時前後からと遅い時間ではあるが，お互いに経験した症例を紹介，プレゼンテーションしている．了徳寺学園医療専門学校の教室で行っているので，やる気のある学生の参加も容認している．

勉強会のあり方について関口柔道整復師の考える目的は，若い柔道整復師がいろいろな症例を臨床に生かせるように検討して，現場で活躍することであるとのことであった．各クリニック間で施術方法が同じとは限らないし，発表すれば自分で症例をしっかり調べることになり知識が向上すること，また若い柔道整復師が頑張ることで，先輩先生方への刺激となるのではと考えているようであった．実際，若手からは経験が少ないので症例をみることができるのは有益であり，刺激になるという意見が多くあった．さらに目標として学会発表をすることを考え，この会を学会発表の練習の場とする意義もあると考えているとのことである．また，柔道整復師にとって我々のような整形外科医の参加意義は，保存的治療のみならず手術の経験があることで，異なった見方で症例を考えられる点があるとも考えていた．確かに手術は柔道整復師の興味の一つであろう．私も皆で議論をする中で，整形外科医として成長することができると考えている．今後も柔道整復師の治療やその診方を理解し若手柔道整復師と熱く議論できる場とし，良好な関係を築いて患者の望む最良の治療ができるよう，勉強会に積極的に参加していきたいと考えている．（写真1）

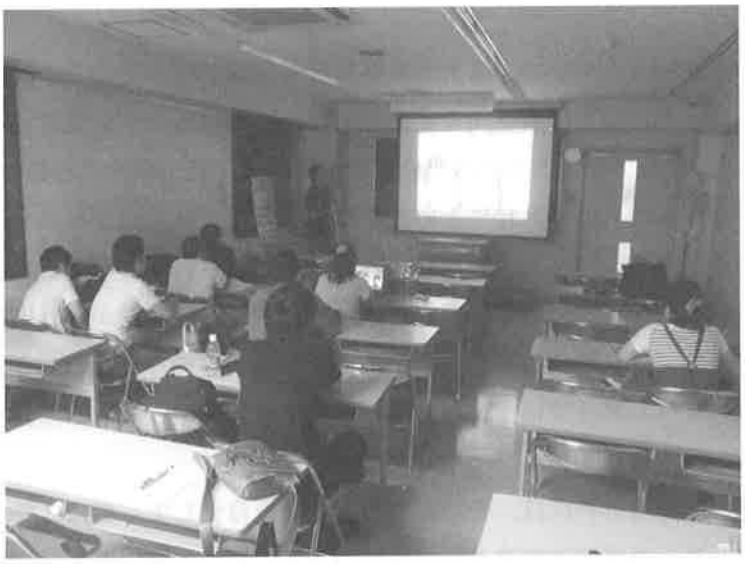

写真１　勉強会の様子

卒後教育２：学会発表

大学勤務の若手柔道整復師である松本助手とともに整形外科の学会に参加，共同発表する機会を得た．2011年6月に行われた第3回日本膝・関節鏡・スポーツ学会（JOSKAS）に演題が採択され，ポスター発表することができた．演題名は『膝蓋骨下部解剖報告及び膝蓋骨下部で生じた骨折の2症例』であり，症例報告と解剖の内容であった[1]．3000人前後が参加する整形外科学会で発表の機会を与えられたのは，とても有意義なことであった．また，松本助手にとっては，学会は始めての経験であったが，内容について解剖学的な考察を含めたいという松本助手の強い希望を持っていたので，大学勤務前・後に時間を作って東京医科大学人体解剖学講座に足を運び，屍体膝による検討も行った．松本助手からは，「医師を含めすべての医療人から質問攻めにあうような良い発表がしたいという今後の目標ができた」と意欲的な感想を聞くことができた．私は，本人の情熱が十分にあり時間をみつけて研究活動を行えば，柔道整復師以外の学会にも参加発表する門戸は開かれていると考える．（写真2）

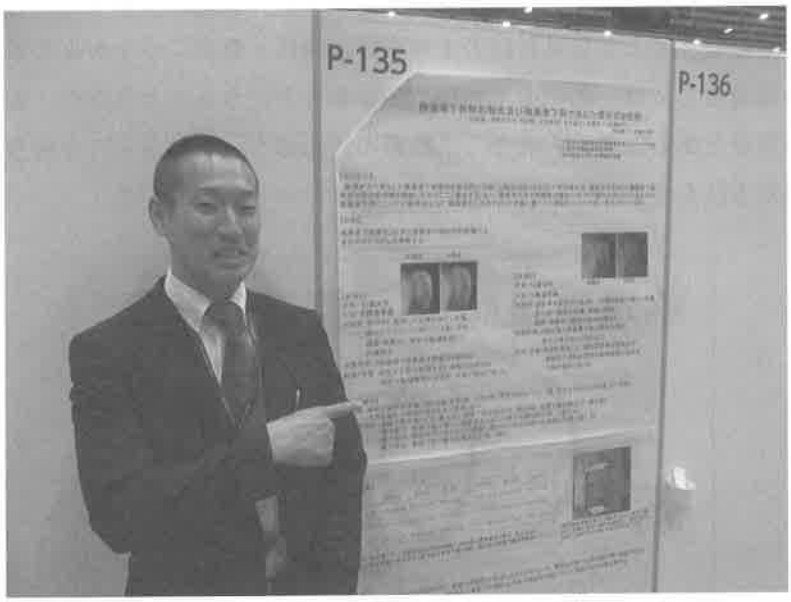

写真２　学会発表（3rd　JOSKAS 2011）　松本助手ポスター前にて

Ⅲ．考察

柔道整復師の知識や診断能力について，また整形外科医と比較しているような論文は渉猟しえた限りほとんどないが，柏葉らは，先に他の医療機関を受診し，紹介にて膝前十字靭帯再建術を施行した例での診断率の検討をしている[2]．それによると，先の他の医療機関として接骨院を含む群の診断率は病院群・整形外科診療所（医院）群よりかなり低く，10％という結果であった．さらにまとめで，接骨院を含む群では適切な診断・治療は期待できないため，この部門から患者を整形外科へと導くシステムが必要とされていた．これについて柔道整復師教育をしてきた観点からは，知識や診断能力がそれほど違うとは考えていないため，疑問に思うところではある．しかし，そのような事実が述べられていることを考えれば，柔道整復師の知識や診断能力のレベルアップは不可欠であり，学生時代に引き続き卒後教育も充実させていくことは重要であると考えられる．

我々柔整師教育に携わる整形外科医は，その教育の重要性を自覚して，真に必要な整形外科的な知識を伝えるため，自己研鑽と各々の専門的知識や他の分野の知識の獲得の継続が不可欠であると考える[3]．

また，柔道整復師と整形外科医について述べた論文はほとんどないが，大森は柔道整復師も正確な評価・治療への知識が必要であり，X-P・CT・MRI・血液検査などデジタル的な要素を含めた評価の重要性を述べている[4]．これは外観からだけではすべてを判断するのは困難であるため，数多くの画像を見ることができるように，経験のある柔道整復師や整形外科医が働きかけることが必要と思われる．今回の卒後教育1の勉強会では，プレゼンテーション等を通じて柔道整復師としての知識の向上，疾患の共通の理解ができると考えている．また同時に，柔道整復師と整形外科医の症例を共有し議論する場として有意義なものになっていると感じている．

堺は柔道整復師と整形外科各々の治療法の理解と受容，保存的治療と手術的治療を要するものの見極めについて柔道整復師と整形外科医の住み分けの必要性を論じている[5]．確かに手術療法やその他を含めた整形外科の診療範囲は柔道整復師よりも大きくなるが，整形外科医の扱わない治療もあると考えられる（図1）．無論，双方の治療が重なることもあるがその分野ではお互いに協力し考えていくことが疾患等をより深く理解していくことにつながると考えている．今回の卒後教育2の学会発表では，整形外科医と協力した共同発表の場であったが，このような大規模な整形外科の学会に参加することは，新しい知識を得る場ともなるため，柔道整復師と整形外科医のより良好な関係・発展につながると考えている．

今後の卒後教育の課題としては，勉強会への積極的な参加ができるかどうかや，柔道整復師にふさわしい学会発表演題の選択などあると考えられる．これらの課題についてはさらに今後も継続していく中で検討し，卒後教育の他の方法も考えながら日々挑戦していきたいと考えている．

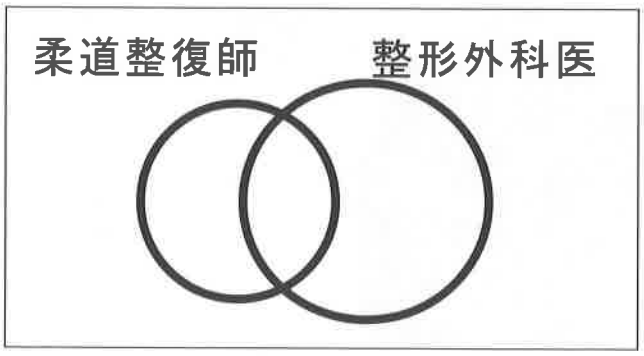

図１　柔道整復師と整形外科医

Ⅳ．まとめ

1．整形外科医の立場から，学習意欲，志の高い柔道整復師に，卒後教育として勉強会，学会発表等を働きかけることは，質の高い柔道整復師教育・養成につながると考えられた．

2．今後も微力ながら協力・助言を行い，さらなる柔道整復師の地位・社会認識の向上に貢献したいと考えている．

文献

1）松本 揚ほか(2011) 膝蓋骨下部解剖報告及び膝蓋骨下部で生じた骨折の2症例．JOSKAS 36 (4)，129.

2）柏葉 光宏ほか(2011) 前十字靭帯損傷患者が再建術にいたるまでの道のり―診断・治療が遅れる原因の分析．整形外科62，659-662.

3）岡田 尚之ほか(2011) 柔道整復師に対する整形外科教育―専門学校・大学教育における工夫と問題点．了徳寺大学紀要5，79-84.

4）大森 淳次(2010) 病院で働く柔道整復師の役割．柔道整復接骨医学18，273-277.

5）堺 研二(2010) 現代医療のなかにおける柔道整復師の今後の在り方．柔道整復接骨医学18，267-272.

(平成24年1月４日稿)

査読終了年月日　平成24年２月６日